

# 磯崎さんとの一日

神代雄一郎（評論家・明治大学教授）

## 赤い砂岩

福岡からの最終便で飛んできて、羽田から高速道路を走る車の中で、わたしは川端康成の自殺を知らせるラジオをきいた。直接何の関係もないのに、にわかにそわそわとするような気配が身内に沸いてきて、最初に想いだされたのは、毎日新聞のビルのエレベーターで、偶然川端さんとふたりきりになり、9階のアラスカまで上っていた時のことである。その少しまえに、わたしは川端さんが裏の赤いマントを買おうとする心の動きを書いた随筆を読んでいたので、アラスカのクローケにあづけられるコートの裏が何色をしているか、気にして見ていた。

つい10日ほどまえ、津軽を北へ深く旅した時、最初によった金木の町で、やはり自殺をした太宰治の生家を見たのだが、いまは斜陽館と呼ばれる旅館になった古い富豪の建築は、まわりを軒蛇腹がつき、出入口がアーチに積まれた煉瓦塀でかこっていた。北の辺境の積雪の中で、明治40年につくられたという赤い煉瓦と顔を合わせるのは、何か異様な気持にさせるものがあった。この旅のことは、「赤物」と題して「学鏡」に書いたばかりだが、川端さんの裏の赤いマントからつづいて想いだされたのは、不思議なことにこの太宰の生家の赤煉瓦だった。

そしてこんどは、今日みた福岡相互銀行本店の、その外壁にはられた赤いインド産の砂岩が浮かんできた。あっ、あれも赤物だったのかと思いついた。このインド産の砂岩は、冷静には茶色というべき色あいだろうが、太宰の煉瓦が実際は煉瓦色なのに、まさに赤煉瓦と印象されたように、磯崎さんの砂岩も隣のビルのガラスのカーテンウォールなどと比べると、きっと驚くような赤と印象されるものを内に秘めているように感じられた。ついさっき、飛行機に乗る直前まで、わたしは和田門とかいう五島肉のうまいレストランで、磯崎さんたちと食事を楽しんでいた。磯崎さんはわざわざ席を立って、沢山積んであるワインの瓶の中からロゼを選びだしてくれて、その薄赤い液体が凹凸のあるワイン・グラスの中でとろとろと眺められたときにも、わたしはまだあのインドの砂岩に納得がゆかないでいた。それがいま、羽田からの高速道路で、川端さんの死を知って醉がさめてゆく中で、たちまち理解できたのだった。

このごろどうしたことか、色がしきりと気にかかる。中でも一番ひっかかってくるのが赤である。気をつけてみていると、最近ジャーナリズムをにぎわせているのも、連合赤軍だったり、性の解放にともなう旧赤線地帯だったり、地方の住民が反対に立ちあがる赤字線廃止だったりする。たしかに赤という色は何かをしてかすのような濃厚な意味をもつていて、そのうちに「赤物」という人形師の言葉にぶつかってはっとした。赤物とは、獅子頭や達磨<sup>がしら だるま</sup>で代表される、民衆の祭に出現するような、民話や伝説の主をかたどったものである。これに対して、「白物」という言葉があり、それは貴族的な、白く厚く化粧した内裏難のようなもので代表される。そして赤物のほうは、赤くどんどんと塗られていなくても、たとえば赤鬼でなくて青鬼でも、やはり赤物と呼ばれる。つまり精神類型としては、赤物はかつていわれた縄文的なものに、そして白物は弥生的なものに、それぞれ相応すると考えていいだろう。川端さんのマントの裏の赤から、太宰の生家の赤煉瓦、そして磯崎さんの赤い砂岩と連想てきて、わたしは福岡相互銀行本店の外観は赤物だと理解したわけだが、それはインド産の茶色の砂岩だけによるわけではない。材料だけでも申せば、たしかに中央の高層部にはられたこの砂岩はめだって赤く眺められるが、他にも、東西両側の低層部に使われている赤錆び処理された鉄材も文字どおり赤を印象させるし、長さ80mにおよぶ巨大な梁をおおつた、磨かれた花崗石もスウェーデン産の赤みかけなら、それをファサードで支える円筒形の部分をおおっているのも、同じスウェーデンの赤みかけを熱処理したものである。赤くない部分といつたら、正面中央入口のイタリア産大理石と、中央高層部の数少ない開口部まわりに使われた、ポルトガルかとかの砂岩、それらが僅かに白っぽいだけである。

だがそうした、色の印象だけでなく、もっと本質的にこの建築が赤物であるのを感じるのは、周囲の建築環境、人工環境と比べてみるとときである。前面に眺められる国鉄の駅も、道路をへだてて真正面に対する郵便局も、横に連なるいまやこの建物とともに駅前の街の壁の表情を形成しようとしているビルも、みんなガラスや軽金属のカーテンウォールにおおわれたり、あるいは帶のような連続窓や等間隔に開口を整然とならべたてた姿をしている。まさに近代建築家たちが、その理性に従って建てつづけてきた、

近代の白物である。

だが福岡相互銀行本店だけが、ちがっている。赤物を連想させた赤っぽい色だけではなくて、まず第1に、建物が他のビルのように道路の境界線から真上にたちのぼっているのではなくて、前面に押し出されているのは3階分ぐらいの低層部で、その1階は、先の熱処理された赤みかけの円筒のまるみが印象的で、その上に、磨かれた赤みかけの層が左右に直線的に走り、そのまた上部に、赤錆びた骨にとりつけられたガラスのトップライトが見えたりする。そしてそれからずっと後退して砂岩でおおわれた高層部が、のぞみ見られる。この骨格は、おそらく骨組だけだった建設の途中には、周囲のビルと比べたら恐龍の骸骨を見るように、アンバランスに感じられたことだろう。もちろん完成したいまは、文字どおりさまざまな外装材が歌いあって、骨格だけから予想されたようなグロテスクな感じも、いたけだかな感じも、それほど強くないといっていい。

むしろやわらかい感じを受ける。つまり、第2に、周囲のビルの固く冷たいカーテンウォールとの対比だが、磯崎さんはこの建物が東西に広く面しているのでカーテンウォールより石貼りのほうが熱処理に有利だと説明していたし、インドの砂岩をつかってもカーテンウォールより経済的にあがったと語っていた。もっともなことである。わたしが特に興味をもったのは、高層部をおおうインドの砂岩が、切ったり磨いたりしないで、その割りはだをみせて貼られていることだった。遠望しても、このビルはひとわざ柔らかく熱っぽく眺められたが、それはこの割りはだと赤っぽい色のせいだろう。わたしの友人に、中近東から砂岩の彫刻を買ってきていた男がいて、日本についたら崩壊して砂になったという話をきいた。それをわたしは磯崎さんに冗談にはなしたが、砂岩にはその粒子が見えて、崩壊を感じさせるようなところがある。それが砂岩のよさで、そうした性質を十分に歌わせておいて、そこから溢れてくるやわらかさを、彼は低層部に一直線に走る巨大な梁を磨かれたみかけでおおい、きゅっと締めているのである。

## モノクロームな内容

編集部がわたしの文章に期待しているのは、磯崎新さんの最近のデザインの傾向について、ということらしい。だから本店の赤い砂岩にばかり、そうかかずらわっているわけにもゆかない。しかし同じ日にみた長住と六本松の支店は、極めて規格的な構成をもつていて、その外観だけにはとりたててわたしが執着するようなものもない。いわば白物的なもので、この2支店の設計は、本店の設計から大分の医師会館の増築を経て後のものであるという。意識的に手法を切りかえているらしいから、これら全部から最近

の傾向を発見するのはむつかしかろう。デザインの立場は、本誌4月号に本人自身がさっぱりと明確に嘘もなく書いている。だからそれを読んでいただいたほうがいい。

全体の傾向ではなく、つまりもうあの建築関係の人たちの間でしか通用しない主義主張にかかわる言葉には、わたしは関心も興味もない。一方では、一般の人たちには不可解な高級らしい言葉をしゃべりまくり、他方では雨もりといった卑俗なことを気にしながら仕事をしていて、本当に建築家らしい人格がでてゆくはずがない。自分の人生を根にして語りつければいいので、そういう意味で、つまり福岡相互銀行本店・大分医師会館増築・福岡相互銀行長住支店・同六本松支店全体に見られるデザイン傾向ではなくて、これら全部からわたしが感じたのは、磯崎新は、最近多くの建築家をおおっている沈滞気配の中で、ただひとり珍しくはっきりと大きく育ち、生長してきているということだった。

まさに、グイグイという形容詞をつけたくなるような生長ぶりで、それをどんなところでわたしが感じたかといえば、今度は実際にみることができなかったのだが、あの大分医師会館の旧館と新館のつなぎ方も、そのひとつだ。あのもとの会館は、極めて独立性の強い設計で、つなげて増築のしようもないと思われるのだが、写真や図面で見るとそれをもの見事にやってのけている。他の人だったら誰もできなかつたのではなかろうか。うんと個性的で独立的なものをつくっておくことは、そういう意味では次の増築の仕事を約束させているようなものだ、とさえいいたくなる。それから、話していくよくわかったのだが、日本の建築家たちがあまり興味を示さなかったライトやマッキントッシュのような人の仕事をまで、ずいぶん執拗に実際に見て歩いていて、それらの手法を養分にしてしまっていること。もう20年もまえのことになろう、わたしの最初の単行本「マッキントッシュ」のことを話されたりして、こちらがはにかむやらはずかしがるやらである。長住支店の、こまかく正方形に格子割りされたガラスのドアには、わたしはマッキントッシュの影を見たように思った。こんなことはほんの一例で、大きいくらい磯崎さんの、とくに建築内部で発揮されている色や光に関する感度が、極めてゆたかに、しかも鋭くなっていることで、それはこうした実際にみた沢山の手法が養分になっているのではないかと想像された。

そこで内部の話に入ってゆくわけだが、ここでもやはり、まず福岡相互銀行本店の、それも6階の重役関係のフロアを問題にしないわけにはいかない。ここでわたしは近代運動の初期の、色彩を排除してしまった、モノクロームな世界が、どんなものであったかを見せてもらったような気が、まずした。キューブизмにも、シユールリアリズムにも、その初期にはこんな世界があったように思う。そして機械を礼賛した近代運動の初期にも、それがあった。

このモノクロームな世界にとっては、金属の輝きが、つまりは銀や金が、ガラスや鏡が、結局はさまざまな光がどんなに効果的かということが、まず最初に了解された。この世界は以前にあったとすれば、いま書いたような近代初期の機械礼賛の時代のもので、磯崎さんのつくった世界もこの系統に属するといつていいだろう。面白いのは、この近代初期の、モノクロームで、金属の光沢と光線に輝く内部空間は、一般の建築家たちにとってもう忘れ去られた歴史の遺物になっているということだ。しかし磯崎さんにとって、それがやはり近代の手法であり、彼のボキャブラリィの重要なひとつになっているということだ。この相違は、一方は過去のものを惜しげもなく捨て去りながら、ひたすら新しいものに執着して探索・模索する立場と、他方は、近代建築の、あるいはもっと広く建築の、あるいはもっと広く建築物すべての手法を自身のボキャブラリィに加え積みながらつくる立場との、違いを示しているのだろう。磯崎さんの最近は、むしろ後者に重点があるように見受けられる。そしてこの相

違こそは、五期会をふくむそれ以前の人たちと、磯崎さんを最年長とするそれ以後の人たちとのちがいのようだ。だが、磯崎さんのつくったモノクロームな内部が、ただ近代初期の手法のくりかえしかというと、それはちがう。先にその系統に属するだろうといったのはそのためで、たしかにこのモノクロームな世界には、それゆえにプロイヤーさんの金属パイプの椅子や、宮脇愛子さんの金の角パイプを束ねた照明や金色の時計はよく似合うのだが、そのモノクロームを破る色彩が、ここには加わっている。それはサム・フランシスや斎藤義重氏の絵画だったり、色のある焼物などの置物だったりするのだが、わたしが興味を引かれたのはそれらの芸術品のギャラリー風な援用よりも、実はこのフロア全体に敷かれているカーペットが、一見黒でありながら、実は赤味を加えた黒であったり、階段ホールの床に四半に市松にはられたビニール系のタイルの、それがただ黑白市松に感じられるのではなくて、何か別の意味をもって浮かびあがっている姿や、重役の食堂の例のマリリン・モンロー形の椅子が、内が紫、外が

黄で貼られるといった特異な色彩だったり、というところにある。つまり、近代初期のモノクロームな内部がまったく欠いていた文学的なものが、ここにはある。その文学性がどんなものかというと、わたしには超現実的な、つまりシュールリアリズムが内包していたものに近く感じられた。黒いカーペットが、ふみつけると赤っぽい靴あとを暫時残してみたり、どこの銀行の重役室にもある、建築家にとっては置き場所にこまるような贈物が意外とピタッとあってしまったり、あるいはマリリンの裸形のシュリエットから生まれた椅子が、同性の性交渉を刺激する紫と、異性間のそれを高揚する黄とで貼られて、ある視角からは紫ばかりと見えたものが、急に対極的な反対色である黄に変わるといった眺めは、シュールの世界にごく接近しているように感得された。

## 浮上する空間

このモノクロームで、しかもシュール的な文学性をもった手法で、銀行という機能をもつ建築の内部すべてをつくり尽すこととは、もちろん困難だろう。重役階でいえば、4つの応接間をそれぞれ4人の作家にまかせて、別の雰囲気をつくり、モノクロームの世界を補おうとしているようだが、その4室のうち、磯崎自身のやったものが抜群に秀れるという、皮肉な結果になっている。斎藤義重氏のやったものがそれについていいが、ここでは漆塗りの椅子が特に注目された。それで思いだすのだが、磯崎さんの空間の中では、どうも木材をその材質をみせて使った部分は、みんなわたしには気に入らなかった。なんか材料そのものが温かすぎてだれるような、とにかく木材というもののする発言がここではまさに中途半端に感じられてしまうのである。ペンキで塗ってしまったものはいいのに、何故だろうか。

重役階の4つの応接間——というよりは磯崎さんのを除いた3つの応接間が、モノクロームでシュール的な調子をそれでもまあ何とか破っているように、こんどはこの建物全体の中で重役階の内部に抗するように、この大きな本店の中には、いくつかの見せ場があり、独特な雰囲気で香りたっている。そのひとつふたつをあげてみると、この銀行の心臓部にあたるコンピュータを内蔵した階の中央にある、電子計算機にたずさわる人の休憩室は、思いきってやわらかくサイケ調で、人間の起居や日常の動作をとろとろに解放させてしまうような無様式だし、1階の、それこそお客様と銀行マンとがそここで対応する営業ホールの、その街路側のふたつの円筒状の高い空間は、極めて白く明るく、めざめるように注目された。

だが何といっても、重役階のモノクロームな世界に感覚的にみごとにつながりながら展開しているのは、この本店建物の北側入口

の、この建物の高層部をつらぬいて吹抜けている空間構成とインテリアだろう。その上部には、この吹抜け空間に浮いたような会議室があったり、中間には空中廊下があって、小さな集会室に通じていたりする。そして人びとの入ってくる玄関ホールになっている1階では、壁面の下端の幅木や椅子の足や受付デスクの脚が磨かれたステンレスでつくられていて、それらがさまざまな方向からあてられる光線で浮上するような、上昇の方向性を与えられている。そして、このとてつもなく高い空間につづくエレベーター前の空間は、低く頭もつかえそうに感じさせて、しかもその天井は真赤である。

この浮上するような空間のドラマは、空間の構成のしかたとしては、すでに大分図書館の設計で芽ばえており、大分の福岡相互銀行支店で空中廊下として出現し、準備されていたように思われる。発生的には、銀行建築が伝統的にもっていた高大な営業ホールの近代化として発想されたものだろうが、それが福岡の本店では、営業ホールのほうはあまり高くせずに、もっと完成成熟した姿で北側の入口ホールに集約的に出現し、またこの浮上する空間創成の手法の高まりが、大分医師会館増築の、その旧館との困難なつなぎを可能にし、そして福岡の長住支店や六本松支店では、ガラスやアルミパネルという、極端に白くも黒くもない、モノクロームだが明度の淡い変化で統一した、いわゆる外壁外観をなくしてしまったような建築を、実現したのだろう。

規格寸法の正方形のガラスで構成された長住支店では、わたしはこれほど内部と外部の差を感じさせない建物は、現代では珍しいのではないかと思った。それはまさに、1851年のロンドン万博に建てられた水晶宮の、小形な復活を感じさせる。そして六本松支店のほうも、こちらはガラスとちがって不透明なアルミパネルをつかいながら、しかしここでも内部外部の差はなくなっている。こちらではわたしは、初期のデ・スタイルの作品を想起した。水晶宮もデ・スタイルも、もうみんなが歴史としてしかえりみようとしていない、まさにさきにもふれた近代初期の発言である。だがどうやらここでも、磯崎さんはそれらを歴史としてではなく、やはり近代なり現代なりに生きる人間の感覚との対応のボキャブラリィとしてつかまえているように見える。これが磯崎さんの、他の人たちとはちがう立場だと、だんだんはっきりとわたしには認識されてくる。

しかしここでも、全体を中間明度の淡い相違で構成しながら、しかもその世界に光線が重ねてうつしだす陰影を、ドラマティックに期待し、実際に定着させているところを見ると、これまた、やはり水晶宮やデ・スタイルとは本質的に変質し、現代的に成長していくことが納得される。そしてもうこれらの中では、そして本店の入口ホールでも、空中廊下は、かつての大分支店のような固い

存在としているのではなくて、白っぽい、淡い、たちのぼる光や空気の中に、半ば溶解したような姿になっている。わたしは、長住支店の1階営業ホールに導かれたとき、マリヤ幼稚園のようだと、思わず失礼な失言をしてしまったけれども、いまやどの銀行でも見られる子供の遊戯用の設備や、金モールでふちどられた掲示や、あばれまわるような字体のポスターがなかったら、まさにこの段階で、磯崎さんは浮上する空間の創成手法を完成したように見えるといって、過言ではないだろう。

では何故、磯崎さんは執拗に、この浮上する空間を追いつくつたのだろうか。先にもふれたように、それははじめ、銀行建築という課題を得て、その営業ホールの伝統的な高く広い吹抜け空間を、何とか近代化し、現代のドラマティックな空間に再構成しようとすることで発想されたものだったろう。だがそれならば、それは何故、他の手法ではなくて、浮上する空間というかたちを取ったのだろうか。元来静止の空間である建築空間に、何か動的な姿勢

を与えるとする指向は、当然生まれてこようが、その中から、いわばフロイト的な夢の中でしか人間が感覚できないような、浮上性といったものに、磯崎さんはどうしてこうもこだわったのだろうか。

この深層的な精神世界こそが、あるいは磯崎さんの、本当に他の建築家たちとちがって、特異にぬきんでた持物であるのかもしれない。そしてそこではじめて、わたしたちは彼の建築作品というものからいったん離れて、じかに磯崎さんという人間に結びつき、その心にたちいることで、それをつかみとることで、ふたたび建築作品の解釈にたちもどらなければならない、という経過をたどることになるだろう。しかしそれは、もっと磯崎新さんと近しい、親しい人たちによってはじめて可能のことのように思われる。まったく久しぶりに、福岡で一日を磯崎さんとともにすごしたわたしには、それはまったくといっていいほど荷の重い、不可能な仕事である。

パンキングホール正面入口部分 階段・一部壁 イタリア産大理石